

第三章 丸山豊の生涯と業績

第一節 年譜

一九一五年(大正四) 三月三十日、福岡県八女郡広川町大字新代八一二番地で、医師丸山平次郎、妻ヒテヲの長男として生れた。一姉あり、文子という。代々神職の家であったが、祖父光祿のときに神職を廃して医師となる。この祖父は評判の秀才で文才に富んでいたと聞くが、後に遺っているのはあほだら経の作詞ノートのみ。性質は闊達だが、放埒で、家財を殆ど失ってしまった。ヒテヲはその一人娘。養子にきた平次郎は久留米の莊島町生れ。下級武士の子で、律義だが、病身であった。その夏、両親とともに久留米市日吉町八九番地に転居。某料亭の跡を借りて、父は泌尿器科医院を開業した。

一九一八年(大正七)

医院は久留米市櫛原町六番地に移る。



父・平次郎に抱かれる丸山豊

拝に通ったが、キリスト教的影響はほとんど受けず。

一九一九年(大正八)

屋敷のなかに楠の大樹一〇本あり、肉桂の木、ザボンの木などがあった。
ルーテル教会経営の日善幼稚園に入園。日曜日には教会日曜礼

一九二〇年(大正九) 四月弟忠良誕生。父は病弱のため短気であったが、徹底した合理主義者で、自由主義の傾向も強かった。極端に子煩悩で、子供たちは父に叱責された覚えがない。



左から豊、弟忠良、父平次郎、母ヒテヲ

一九二一年(大正十)

四月久留米市日吉尋常小学校入学。小学校は市の中心部にあり、軍人・医師・呉服問屋・芸妓置屋等の子弟が多く、ぜんたいに利発早熟の傾きがあった。

一九二五年(大正十四)

秋、医院はさらに久留米市莊島町法雲寺丁七五番地に移る。

一九二七年(昭和二)

中学明善校入学。同学年に絵画や詩歌を好むもの多し。河北倫明・岸田勉等も同学年であった。弁論部と美術部に入部。河北と小雑誌『麦笛』を作る。約一カ年で廃刊。白秋詩を愛読し、朝日新聞に詩を投稿して白秋により入選したことがある。

一九二八年(昭和三)

句作をはじめ、河野静雲主宰の『木屋』に投句。一年以上級であった石田光明、同学年酒井富夫等と明善俳句研究会を結び句誌『緋緘』を発行した。

一九二九年(昭和四)

授業時間中、こっそり『戦旗』が回覧

されたりしたのがこの頃。句作の興さめ、詩作にのみ熱中す。同級生井上光臣に誘われて同人誌『街路樹』に参加し、前衛的詩人青木勇を知る。『詩と詩論』をよみ、現代詩への眼が少しずつ開けてきた。

一九三〇年（昭和五） 野田宇太郎と友情を結ぶ。福岡市の詩人たち（原田種夫・山田牙城ら）との交流はじまる。マルキストとしての牛島春子を知る。

一九三一年（昭和六） 五月二十九日、弟三孝死亡。野田宇太郎と詩誌『日時計』や『ぼえむ』を刊行す。同人には二人の他には近藤益雄がいた。『詩神』に作品が推薦される。おなじ欄に推薦してあったことが機縁で鹿児島島の詩人藤田文江を知り、修学旅行の途次、友人とともに彼女を訪問し、

その強烈な詩精神におどろく。詩誌『椎の木』の同人となる。校内に「無産者政治教程」等の読書会をつくる。

一九三二年（昭和七） 四月、

父に無断で上京し、姉婿中島安賢の姉夫婦である東京小石川の八尋を訪れ、早稲田大学第一高等学院仏文科に入学。このとき扁桃炎のため発熱病臥したが、当時小学五年生であった八尋の三女せきが子供ながら親切にふるまってくれた。これが今日の妻である。高等学院では同級に八木義徳等がいたし、



早稲田時代の豊氏（於箱根）

一年違いには木下夕爾もいたが、縁あって丸山は上級の石川利光等と交わり、雑誌『貿易風』の同人となる。末席ながら『椎の木』の同人ということで、中野の百田宗治への訪問もつづけた。一方、友人等と『早稲田童謡』を創刊した。築地小劇場に通ったり、バレエ靴を買って舞踊を学んだり、野田宇太郎と年長の詩人を訪問したり、まとまりのない生活をつづけた。八月、友人二名と大島・伊豆旅行。さらに別の友人と二人で天草紀行。

一九三三年（昭和八） 四月、

第一高等学院退学。九州医学専門学校入学。乗馬部に入部。この夏、約一カ月間壱岐鯨伏温泉に滞在。

一九三四年（昭和九） 三月

野田宇太郎・青木勇・原田春海・俣野衛と「ボアイエルのクラブ」を結成。四月「ボアイエルのクラブ」詩稿及び色紙展。十月、詩集『玻璃の乳房』を「ボアイエルのクラブ」



久留米医学専門学校4年生の豊（左端）

より自費出版。装釘造本は野田宇太郎。十一月、『詩法』同人となる。『詩法』誌上で渡辺修三が『玻璃の乳房』の紹介をした。

一九三五年（昭和十） 一月、久留米で文化擁護を旗じるしとした「リベルテの会」を創設。この年から矢野朗との交友はじまる。二月、父平次郎他界。十二月、詩集『よびな』を「よびな刊行会」より出版。装釘は野田宇太郎の好意。

一九三六年（昭和十一） 六月、「リベルテの会」解散。矢野朗等と『文学会議』を創刊し、火野葦平も参加。

一九三七年（昭和十二） 三月、九州医学専門学校を卒業す。

一旦母校内科医局に入局した後、学友の叔父の経営である鎌倉大庭病院に就職を決めた。『文学会議』を脱退す。五月、鎌倉材木座大庭病院に就職。この年は医学に専念し、文学的交友としては川口敏男、川田総七の来訪を受けただけである。坂本越郎の『純粹詩』に同人として参加。十二月、徴兵検査のため一時帰郷。第二補充兵役。

一九三八年（昭和十三） 義兄重症肺炎に罹り、看護のため福岡県朝倉郡に帰る。経過永びき、止むをえず大庭病院を退職。三月祖父光祿福岡県小石原にて急逝。

四月、下関市田中町佐島病院に就職。下関の桑原圭介、今田久、小倉の東潤等との交際がはじまる。十二月、詩集『白



昭和 13 年 12 月「白鳥」出版祝賀会 前列左から 6 番目（於下関）

鳥』を純粹詩双書の
一冊として昭森社よ
り出版

一九三九年（昭和十四）

三月、佐島病院を退職し久留米に帰る。久留米諏訪野町に父の親友の経営する小川医院あり、院長病臥中にて、請われて診療を代行することになる。医院は師団司令部の前にあり、近隣に高級軍医多し。

召集近しとうながされ、九月、軍医予備員候補者として歩兵四八連隊に入隊。十二月、一旦除隊。久留米市両替町本間病院に仮寓。

一九四〇年（昭和十五） 一月、臨時召集を受け、久留米陸軍病院附見習士官として入隊。管内生活のまま小説『體温』を執筆。六月、小説家新樹光子との文通がはじまり、婚約す。野田宇太郎と詩誌『抒情詩』を刊行。十一月軍医少尉となる。久留米市西町神浦より陸軍病院に通勤す。

一九四一年（昭和十六） 三月、事情ありて新樹光子との婚約



昭和 15 年 5 月上京する野田宇太郎のための送別会 左から安西均、秋山六郎兵衛、丸山豊、坂宗一 野田宇太郎 豊は軍服姿である

を解く。この頃より福岡市吉岡禪寺洞をししば訪問。八月、陸軍軍医学校に派遣され、特別教育を受ける。この間東京の八尋に滞在す。八尋の三女せきは北里研究所員の医師藤田と結婚早々であり、新夫婦と歓談をつくすことができた。教育を終えて久留米陸軍病院に帰隊と同時に、新作戦を予想した坂口兵团編成業務につく。詩集『未来』を昭森社より出版することになり、詩稿をまとめて送る。（出征するまでに発刊に至らず、戦旅を重ねて翌一七年五月中国雲南省に駐屯し、ここではじめて故国より回送された自らの本を掌にした。装画は海老原喜之助。阪本越郎序文。）十一月、阪口兵团司令部附軍医として兵团とともに隠密裡に久留米を出発し、この日輪送船に分乗して門司港を

出航、南方に向う。日本の陸軍部隊としてはじめて赤道を通過した。「パラオ」島にて開戦を待機。十二月、フィリッピン・ダバオに敵前上陸。

一九四二年（昭和十七）一月、ボルネオ・タラカン島敵前上陸。ボルネオ・バリクパパン沖で深夜海戦がはじまり、私の輸送船に隣した輸送船等沈没。翌二五日朝バリクパパン上陸。三月、ジャワ・クラガンに敵前上陸。軍の先頭を疾走してバタビヤに至る。四月、ビルマ・ラングーン上陸。ビルマを北上して中国雲南省怒江の河岸に至る。竜陵に駐屯。六月、重症マラリアにて野戦病院に入院。後送されてシンガポールに向う。十二月シンガポール着。ジョホールバル陸軍病院に入院。



歩兵148連隊(龍6735部隊)本部前で撮影

一九四三年

(昭和十八)

三月、軍
医中尉に
進級す。
退院して、
マレー・
ラングー
ンを経て、
再びビル

マを北上、雲南省騰越に到着。司令官は水上源蔵少将。

一九四四年（昭和十九）五月、北ビルマ・ミイトキーナ死守の戦闘はじまる。八月、ミイトキーナ守備隊司令官水上少将自決され、遺骨を首にして敵陣を突破。十月、雲南省芒市の竜部隊司令部に到着。この後、北ビルマより中部ビルマを経てタイ国に至るいわゆる白骨街道の患者輸送及び中

継業務にあたる。

一九四五年（昭和二十）八月、ビルマ・タイ国境線上にて終戦。象に乗ってタイ国に移る。中部タイ・バンダーラにて約半年帰国の便を待つ。軍医大尉となる。

一九四六年（昭和二十）浦賀上陸を経て、六月八日久留米駅着。八女郡広川町松崎方に疎開していた母のもとに到着。八月、既に南方戦より帰還していた弟忠良が暫定的に継承していた小川病院を受け、久留米市諏訪野町二三七番地で丸山医院を開設。十一月、戦争未亡人となり遺児玲子をつれて福岡県朝倉郡夜須町に疎開していた八尋せきと会う。

一九四七年（昭和二十二）二月、詩集『孔雀の寺』を金文堂より上梓。装画は岸田勉。三月、八尋せきと婚約す。四月、

野田宇太郎・安西均・佐藤隆・俣野衛・一丸章を同人に誘うて詩誌『母音』を創刊。まもなく、伊藤桂一・岡部隆助・木下夕爾・川口敏男等参加。五月、八尋せきと結婚。媒妁は中島安賢夫婦。十二月、詩集『地下水』を母音社より出版。表紙絵は坂本繁二郎。造本は俣野衛。

一九四八年（昭和二十三）三月、径子出生。四月、『母音』に谷川雁参加。また柿添元・小島直記・安田満参加。

一九四九年（昭和二十四）二月、『母音』第八号に谷川健一参加。岸田勉・赤星孝参加。この号で第一期『母音』終了。

三月、九州大学医学部専攻生となる。指導は樋口謙太郎教授。十二月、長男泉誕生。

一九五〇年（昭和二十五）三月、第二期『母音』出発。森崎和江・平田文也・高木護・松永伍一・川崎洋・有田忠郎・各務章・石本（鵜飼）礼子等新人の執筆はじまる。また、石田光明・桑原圭介等も参加す。十月、久留米大学医学部

専攻生となる。指導は重松俊教授。十月、岸田勉とはかり久留米連合文化会創設。この準備期間より昭和二十七年秋に至るまで、この会の経営に精根をつくす。この十二月から昭和二十七年秋まで久留米連合文化会副会長。「毎日小中学生新聞」児童詩の選にあたる。(昭和二六年まで)

一九五一年(昭和二十六)一月、久留米市歌補作。

一九五二年(昭和二十七)七月、第二期『母音』終了。十月、公選市教育委員に最高点で当選。選挙責任者は石田光明。(昭和三十一年九月三〇日辞任)、十二月、新居竣工、莫愁居と名づく。

一九五三年(昭和二十八)一月、中原繁登の熱意にほだされて、九州朝日放送(K・B・C)創立に力をつくす。光生活協同組合理事長となる。第三期『母音』は一号発行しただけであったが、上田敏雄・崎村久邦・八坂安守等も参加した。八月、九州朝日放送取締役。荒尾高校校歌作詞。

一九五四年(昭和二十九)五月十六日を第一回とし、毎月一回、岸田勉と坂本繁二郎訪問をつづける。第四期『母音』



中央／坂本繁二郎、左／岸田勉、右／丸山豊

に執筆。今田久・加藤真一郎・弓削三男も参加す。七月、久留米大学校歌作詞。十一月、谷川雁の詩集『大地の商人』

発足。谷川雁の「原点が存在する」を巻頭エッセイとし、森崎和江・松永伍一・野田寿子・平田文也・高木護・広瀬美尹・中野正保等活潑

を刊行。

一九五五年(昭和三十)六月、医学博士。

一九五六年(昭和三十一年)第四期『母音』終刊。

一九五七年(昭和三十二年)民事及び家事調停委員となる。十一月、詩集『草刈』を昭森社より出版。同詩集出版記念会

が旭屋で開催。(※)

一九五八年(昭和三十三年)十二月、久留米医師会館に詩碑、除

幕式が行われる。※

一九五九年(昭和三十四)

九州朝日放送取締役を退任。十月、母ヒテヲ他界。

一九六一年(昭和三十六)



詩誌『母音』の同人 右から二人目が豊 (昭和32年11月10日撮影)

八月、福岡農芸高校校歌作詞。九月、詩誌『火』を発行。同人は、渡辺修三・滝口武士・加藤真一郎・今田久・服部伸六・桑原圭介など。

一九六二年(昭和三十七)玲子、富川昭に嫁す。

一九六四年(昭和三十九)一月、医院を久留米市諏訪野町二二

八〇番地に移す。二月、詩誌『火』を終刊。七月、福岡県

詩人会設立。代表幹事。城南高校校歌、久留米高校校歌、

筑邦高校校歌、三井中央高校校歌等作詞。

一九六五年(昭和四十)三月、詩集『愛についてのデッサン』

(国文社)を出版。装画は野見山晁治。久留米市公平委員。八月、西日本短大附属高校校歌作詞。



團伊玖磨氏と歓談する丸山豊

一九六六年（昭和四一）秋、現代詩研究会タキギ塾をひらく。久留米市公平委員長（昭和四十四年八月三十一日まで）

一九六七年（昭和四十二）三月より西日本新聞読者文芸の選詩を担当。九月、アラゴン主催の「LES LETTRES françaises（九月十二日号）」誌上に、「十人の日本詩人」"Dix écrivains Japonais"（Ⅲ）として草野心平と共に紹介される。

一九六八年（昭和四十三）二月、高血圧と虚血性心臓病のため臥床。四月、長篇詩「夏を中心」執筆開始。團伊玖磨作曲合唱組曲として「筑後川」を作詞。五月、詩集『白鳥』（復刻版）をプロダクト埴輪より刊行。

一九六九年（昭和四十四）六月、西日本新聞に連載随筆「月白の道」を執筆。八月、合唱組曲「筑後川」の楽譜がカワイ楽譜より発行さる。

一九七〇年（昭和四十五）四月、思潮社より詩集『水上歩』出版。随筆『月白の道』を創言社の手にて出版。序文は安西均。六月、九州沖縄文化協会のために「南の歌」作詞、作曲は森脇憲三。

一九七一年（昭和四十六）八月、旧作『體温』を矢野朗の批評文と、自らの後記を添えて、プロダクト埴輪より上木。熊本に於ける九州詩人祭の開催に成功。席上「詩と沈黙」と

題して講演。十月、タキギ塾を閉ず。タキギ塾の主要メンバーは詩誌『泥質』を刊行。十一月、徑子、医師有馬恒明に嫁す。



西日本文化賞祝賀会の丸山豊夫妻

一九七二年（昭和四十七）

七月、徳山大学校歌作詞。九月西日本新聞に「櫨の青葉」を執筆。十二月、「熊本日日新聞」に連載随筆「お大事に」を執筆開始。

一九七三年（昭和四十八）

一月、「お大事に」執筆完了。三月、合唱組曲「海上の道」作詞（作曲は團伊玖磨）。五月、合唱組曲「博多」作詞（作曲は石丸寛）。十一月、久留米市第一回文化章受章

一九七四年（昭和四十九年）

※三月久留米市文化功労章祝賀会が開催（於ダイシン）八月、合唱組曲「海上の道」カワイ出版より刊行。十一月、第三十三回西日本文化賞受賞。

※十二月文化賞受賞祝賀会開催（於久留米商工会館）。

一九七六年（昭和五十一）九月、『定本丸山豊全詩集』（創言社）刊行。

一九七八年（昭和五十三）三月、北筑高校校歌作詞。九月、

『定本丸山豊全散文集』刊行。

※以上は『定本丸山豊全散文集（創言社一九七八）』所収の「丸



左森崎和江・中央丸山豊・右松永伍一
—乗谷朝倉氏館跡

山豊年譜」(自筆)を収録した。が、いくつか事務局で追加したところがある。追加部分には文末に※をつけている。以下一九八九年までの記事は再版された『月白の道』(創言社二〇一四)の追補記事である。

一九七九年(昭和五十四) 五月、合唱組曲「大阿蘇」(作曲は團伊玖磨)の楽譜をカワイ出版より刊行。

一九八〇年(昭和五十五) 七月「泥質」休刊。久留米市に転居してきた松原新一(当時の筆名は塩野実)との親交を持つ。

一九八一年(昭和五十六) 二月、小郡市に老人医療とリハビリテーションを主とする丸山病院を開院する。十一月、松原新一編集の「泥群」創刊にあたって、発行人を引き受ける。

一九八二年(昭和五十七) 二月、泉、津留裕子と結婚。十一月、『泥群』創刊

一周年記念文学祭にて講演「文学における真実」(久留米市中央公民館)

一九八三年(昭和五十八)

三月、詩集『球根』

(国文社)を出版。

六月、合唱組曲

「玄海」作詞(作曲は團伊玖磨)。

十一月、松永伍一

の案内で京都旅行をする。

一九八四年(昭和五十九) この年より、松永伍一・森崎和江

と数度の国内旅行を楽しむ(八四年五月、四国松山・道後温泉。八六年十月。越前・若狭。八七年五月、伊豆)。七月二十日、野田宇太郎が死去。

一九八五年(昭和六十) 八月、日本現代詩文庫版『丸山豊詩集』(土曜美術社)を出版。十月、松原新一の個人文芸誌『歩行』第二号が「丸山豊の世界」を特集する。

一九八六年(昭和六十一) 七月、野田宇太郎の詩碑「水鳥」が小郡市松崎に建立される。

一九八七年(昭和六十二) 三月、『校歌会歌等作詞集』(自家版)を出版。四月、小郡市歌を作詞(作曲は安永武一郎)。十一月、「南の細道」を書き下ろして、新訂増補版『月白の道』(創言社)を出版。

一九八八年(昭和六十三) 三月、福岡県立美術館の特別展「イメージの風土学」川「の筑後と海」の筑前」の図録に「光る砂、輝く泥」を寄稿する。

一九八九年(昭和六十四・平成元)、故石橋正二郎生誕百周年顕彰実行委員長を務める。三月、詩集『微安心』(国文社)を出版。現代日本詩人全集『福岡の詩人』(教育企画出版)に収録。六月、永年の詩作活動に対して、日本現代詩人会の「先達詩人」顕彰を受ける。同月九・十一日、日本IBM主催の九州フォーラム慶州会議に参加するため、韓国を訪れる。八月七日(現地時間)、ヨーロッパ家族旅行の途次、米国アンカレッジ市のプロビデンス病院で死去。

※以下、丸山豊氏死去以降の関係の事項をあげる。実行委員会前事務局長の古賀正美が作成した。

一九八九年（平成元）八月廿日 丸山豊氏葬祭及び告別式が石橋文化ホールで行われる。

一九九〇年（平成二）七月 丸山豊をしのぶ一年祭が櫛原のホテルで谷口久留米市長・作家森崎和江さんらが出席し行われる。八月、小郡市立図書館の野田宇太郎文学資料館で「野田宇太郎・丸山豊二人展」が開催される。野田の七回忌・丸山の一周忌を記念したもの。



石橋文化ホールでの葬儀

一九九一年（平成三）九月、丸山豊詩碑

建設委員会（浦園繁会長）の発起人会が開催され、十月から募金を開始し、翌年八月に詩碑建設を始める。

一九九一年（平成三）十一月、丸山豊詩碑除幕式が、百年公園内の詩碑前で行われる。

一九九一年（平成三）十二月、丸山豊記念現代詩賞実行委員会第一回会議が開催される。

一九九二年（平成四）三月、第一回丸山豊記念現代詩賞が谷川俊太郎の詩集「女に」に授与される。贈呈式で、安西均が「丸山豊をしのんで」の記念講演を行う。

一九九三年（平成五）三月、第二回丸山豊記念現代詩賞が伊藤信吉の詩集『上州おたくら 私の方言詩集』に授与される。

一九九三年（平成五）三月、福岡県詩人会によって『復刻版母



詩碑除幕式 百年公園

音』（創言社）が刊行される。

一九九四年（平成六）三月、第三回丸山豊記念現代詩賞を加島祥造・新川和江の詩集『潮の庭から』が受賞する。この年から、贈呈式当日の午前中に久留米百年公園にある丸山豊詩碑前で「母音祭」を開催。

一九九五年（平成七）三月、第四回丸山豊記念現代詩賞を朝倉勇の詩集『鳥の歌』が受賞する。同日午前中、丸

山豊詩碑前で第二回母音祭が開催される。母音賞を受賞した小中学生が詩を朗読。

一九九六年（平成八）三月、第五回丸山豊記念現代詩賞をみずかみかずよの詩集『いのち』が受賞。第三回母音祭が詩碑前で開催される。

一九九七年（平成九）三月、第六回丸山豊記念現代詩賞を安永稔和の詩集『秋山抄』が受賞。受賞式は久留米市庁舎2階くるみホールで開催。第四回母音祭が同日に碑前で開催される。

一九九八年（平成十）三月、第七回丸山豊記念現代詩賞を相澤史郎の詩集『夷歌』が受賞。贈呈式は久留米リサーチセンタールビルで開催。第五回母音祭が碑前で開催される。

一九九九年（平成十一）五月、第八回丸山豊記念現代詩賞を野田寿子の詩集『母の耳』が受賞。

二〇〇〇年（平成十二）五月、第九回丸山豊記念現代詩賞を高



母音祭で詩を朗読する児童（事務局撮影）

良留美子の詩集『風の夜』が受賞する。

二〇〇一年（平成十三）五月、第十回丸山豊記念現代詩賞を高橋順子の詩集『貧乏な椅子』が受賞。

二〇〇二年（平成十四）五月、第十一回丸山豊記念現代詩賞をまど・みちおの詩集『うめぼしリモコン』が受賞。贈呈式で川崎洋・森崎和江・丸山泉によって「丸山豊先生の思い出」という特別対談が行われた。

二〇〇三年（平成十五）五月、第十二回丸山豊記念現代詩賞を金井雄二の詩集『今、ぼくが死んだら』が受賞。

二〇〇四年（平成十六）五月、第十三回丸山豊記念現代詩賞を中上哲夫の詩集『エルヴィスが死んだ日の夜』が受賞。

二〇〇四年（平成十六）十二月、久留米大学校歌五十周年記念「丸山豊 詩とところ」が久留米大学筑水会館で開催される。森崎和江と山本源太が「丸山豊 詩とところ」というタイトルで対談を行った。あわせて、丸山泉より丸山豊蔵書約八千点が久留米大学御井図書館「筑後文化資料室」へ寄贈された。

二〇〇五年（平成十七）五月、第十四回丸山豊記念現代詩賞を森崎和江の詩集『ささ笛ひとつ』が受賞。

二〇〇六年（平成十八）七月、第十五回丸山豊記念現代詩賞を西沢杏子の詩集『ズレる？』が受賞。

二〇〇七年（平成十九）五月、第十六回丸山豊記念現代詩賞を

井川博年の詩集『幸福』が受賞。

二〇〇八年（平成二十）五月、第十七回丸山豊記念現代詩賞を古賀忠昭の詩集『血のたらちね』が受賞。

二〇〇九年（平成二十一）五月、第十八回丸山豊記念現代詩賞を中本道代の詩集『花と死王』が受賞。

二〇〇九年（平成二十一）十二月、久留米連合文化会創立六十周年記念行事として山本源太・鍋島幹夫・松原新一の鼎談「丸山豊―詩的行動をめぐって―」が久留米市立中央図書館で開催される。

二〇一〇年（平成二十二）五月、第十九回丸山豊記念現代詩賞を文月悠光の詩集『適切な世界の適切ならざる私』が受賞。二〇一〇年（平成二十二）五月、丸山泉、『父の話法』（石風社）を刊行。

二〇一一年（平成二十三）五月、第二十回丸山豊記念現代詩賞を佐々木安美の詩集『新しい浮子 古い浮子』が受賞。

二〇一二年（平成二十四）五月、第二十一回丸山豊記念現代詩賞を市原千佳子の詩集『月しるべ』が受賞。

二〇一二年（平成二十四）松原新一編著で『丸山豊の声―輝く泥土の国から―』（弦書房）が刊行される。

二〇一三年（平成二十五）五月、第二十二回丸山豊記念現代詩賞を秋亜綺羅の詩集『透明海岸から鳥の島まで』が受賞。

二〇一四年（平成二十六）五月、第二十三回丸山豊記念現代詩賞を鈴木志郎康の詩集『ペチャブル詩人』が受賞。

二〇一四年（平成二十六）一月、『月白の道』が創言社から再版される。

二〇一五年（平成二十七）一月、『文芸春秋』戦後七十年企画「太平洋戦争の肉声②悲風の大決戦」でミートキーナ攻防戦がとりあげられ、丸山豊の「月白の道」が抄録で掲載さ

れる。

二〇一五年（平成二十七）五月、第二十四回丸山豊記念現代詩賞を若尾儀武の詩集「流れもせんで、在るだけの川」が受賞。

二〇一六年（平成二十八）三月、筑後地域文化誌「あげなどげな」春号に「丸山豊生誕百年記念特集」が掲載される。

二〇一六年（平成二十八）七月、第二十五回丸山豊記念現代詩賞を白井明大の詩集「生きようと生きるほうへ」が受賞。

二〇一六年（平成二十八）十月、第二十八回丸山豊記念現代詩賞実行委員会を開催し、実行委員会の解散を決定する。

〈付記〉

資料の保存と閲覧について

丸山豊記念現代詩賞を受賞した第一回から二十五回までの全詩集二十五冊は久留米市立中央図書館に所蔵されている。また、『定本丸山豊全詩集』（創言社一九七六年）『定本丸山豊全散文集』（創言社一九七八年）、従軍された戦争経験を語る珠玉の随筆である『月白の道』（創言社一九七〇年、新訂増補版一九八七年）など関連図書も多く所蔵されている。閲覧などは市立中央図書館へお問い合わせください。

本書に収録した丸山豊記念現代詩賞実行委員会の事績および各回のパンフレット・チラシ等は公益財団法人久留米文化振興会が事務局を担当した経緯から、同振興会が保管しており、閲覧などを希望される場合は、事前に連絡をいただくことで公開が可能なものもある。また、丸山豊の生涯や詩業を示す写真パネルも20数枚を所蔵しており、展示などに利用も可能である。

丸山豊氏の蔵書約八千点は二〇〇四年（平成十六）に丸山泉氏から久留米大学御井図書館「筑後文化資料室」へ寄贈されている。丸山豊氏の業績を考える時、必ず依拠すべき資料群である。閲覧などを希望される場合は大学図書館へお問い合わせください。